

『本朝女鑑』と軍記

——女性逸話の形成と展開に関して——

大久保 順 子

寛文元年（一六六一）刊の仮名草子『本朝女鑑』十二卷^①の巻一から巻十には、八五話の歴史的な女性逸話が採り上げられている。本作品の所収話の内容が、出典とみられる作品と比べて「虚構」を多くもつことは、青山忠一や浜田啓介をはじめとする諸研究で指摘されている。その「虚構」とは如何なるものであるのか、本稿では先行するテキストとの関係から本作品の方法を探り、その特徴を考察する。さらに、「虚構」がもたらした「解釈」が以降の作品の人物逸話のイメージに与える影響の意義についても考えたい。

一、軍記の女性表象の利用と展開

『本朝女鑑』の「出典」の利用については、その所収話の出典一覧が既に浜田啓介論文^②に指摘されるところである。同じ仮名草子女訓物として先行する作品、例えば北村季吟『仮名列女伝』（明暦元年刊）、辻原元甫『女四書』（明暦二年刊）、『女郎花物語』（万治四年刊）の場合、『列女伝』等や王朝女流歌人等の逸話を出典とするものが多

『本朝女鑑』と軍記

かった。それらと比べ、『本朝女鑑』では全般的に、日本古代の史書や中世の軍記等から採られた女性逸話の比率が増している。軍記物が出典に多く用いられる要因の一つには、本作品成立の当時である寛文期頃の軍談・軍記類の出版の盛行、すなわち近世初期の刊行に始まり「十七世紀後半になって出版ベースに乗っていくうちに通俗歴史読み物として一旦は定型化」の動きを見せるという「軍書」の影響が考えられる。寛文六年（一六六六）刊『和漢書籍目録』¹には、『本朝女鑑』の出典とされる『東鑑』『盛衰記』『平家物語』『曾我物語』『明德記』『北条九代記』『太平記』『甲陽軍鑑』『信長記』『太閤記』等の作品名の他、『同（平家物語）評判』『同（太平記）大全』等の関連軍書の書名が並んでおり、作者が当時の文献から題材を摂取している可能性は高い。軍記的作品を出典とする女性の逸話において、『本朝女鑑』の筆の「合戦の模様の描出に力がそがれ」⁵る、という傾向も指摘されている。そこで、『本朝女鑑』のうち軍記的作品が出典とみられる所収話の本文に、当時の書承テキストがどのように関与しているのかを考察してみたい。

『本朝女鑑』の場合、特に巻四・巻六・巻八に中世軍記の受容が著しく認められる。例えば巻四仁智部下ノ七「山名陸奥守妻」では、明德の乱の山名氏清討死の際、実子の左馬助と七郎兄弟が丹後路へ脱出、有馬で出家する。避難していた母の北の方は、「親のうたるゝを見すてゝ。おちうせたらんふかくさよ。親の別れの悲しき。子どもかうきなをながしける口おしさ」と悲憤し、落ち延びた和泉日根野で自害を図った。瀕死の母は、訪れた息子二人との面会を拒絶する。

御母はかほをふりて。弓やとる人の子のはたちにあまりて父と共に軍に立て。目のまへに親のうたるゝを見すてゝにけおち。身のをき所のなきまゝに通世入道するだにくちおしく。人の別れの悲しさに。ためしなき身の自害して。すでに臨終にとりむかふ。母をみるとは何事ぞや。たとひ其家にあらぬ人なりとも。父をみすてゝにぐるといふ。憶病ものやあるべき。烏帽子にせられし。小二郎だにも義理を思ひて。親とおなじくうち死して。名をあげたり。これほど未練の人くを。子なればとて此世に二たびみん事はかなふまじ。

息子への激烈な非難と訓戒の部分は「この凄絶とも云うべき母親の姿を、モノローグで述べる」劇的な箇所として、

女訓物の「方法的に一つの発展」「文芸性の獲得」⁽⁶⁾と評価されてもいる。だが、室町軍記『明德記』寛永九年刊本巻下の以下の本文に、この陸奥守妻の描出部分が認められる。

御目少シ見アゲ給タリシ御目ヲフサギ。顔ヲ振テ宣ヒケルハ。加様ニ云フト。聞セ給フ人ノ心モ恥敷ゾトヨ。先案シテ見給ヘ。弓矢取ル人ノ。子ノ二十ニ余リテ。父ノ共ニ軍ノ庭ニ出テ目ノ前ニテ親ノ討ル、ヲ見捨。逃テ身ノ置所ノ無キ儘ニ。入道スルダニ轉手シキニ。人ノ別ノ悲シサニ。タメシナキ身ノ自害シテ。既ニ臨終ニ取向フ母ヲ見ントハ何事ゾヤ。父ニ勝リテ。思ハルベキ。母ガ身ニテモアラバコソ。譬其家ニナレヌ人成共。父ヲ捨テハ。ヨモニゲジ。況ヤ弓矢ヲ家トスル。面々ノ身ニテノ振舞ヲ。我身モ案ジテ見給ヘカシ。猶子ニシタル小次郎ダニモ。嬉敷道トハ。ヨモ思ハジ。義理ヲ思ヘバ力ナク。親ト同ク討死シテ。敵味方ニ普ラレズヤ。是程ノ未練ノ人々ヲ。子ト申シテ今生ニテ。見ヘン事ハ叶マジ。

(『明德記』下、寛永九年刊本)⁽⁷⁾

陸奥守と共に敗死した養子小二郎と比べ、遁走出家した兄弟を非難する「山名陸奥守妻」の表現には、A・Bの『明德記』の文脈と叙述が用いられている。氏清の辞世歌「とり得ずはきえぬと思へあづさ弓ひきてかへらぬ道しはの露」と北の方の歌「しづむともおなしくこえんまてしばしくるしき海の夢のうきはし」に続き、「山名陸奥守妻」はその話末を

これを見聞ける人。みなあはれがりて。そでをぬらさぬはなかりし。まことにおつとに。せつあるのみにあらず。子ををしゆるの道あきらけしと。時の人はおしみけり

と結ぶ。この部分も『明德記』巻下の「見ル人毎ニ哀ミテ。袖ヲヌラサヌハ無リケリ。」の叙述をほぼ踏襲しながら、息子を教誡し夫への節義を守った妻の態度を称揚し、巻題の「仁智」に相当する人物像を造型していると考えられる。

このような軍記の「文芸的」とされる人物造型や場面の叙述の部分の利用は、その他の所収話においても窺われる。『本朝女鑑』巻六節義部下ノ二「右京亮時治妻」の、北条時治が敗戦時に逃がそうとした「女房」の言葉、

女房は大にうらみて。水にすむをしどり。うつばりにすをくふつばめたにも。つばさをはすちきりは。わすれずと申す。ましてとしこあひなれまいらせ。十とせあまりのそでのしたに。二人の子どもをそだてゝ。ちよもといのりしかひもなく。御身はあきのしものしたにふし。子どもはあしたのつゆにさきたちて。きえなんのちのかなしみを。たへしのひてはときまも。ながらふべきわが身かや。

の部分为例に掲げると、慶長十五年板『太平記』卷十一の本文に、この妻の悲愴な覚悟の場面が

女房最ト恨テ水ニ住駕梁ニ巢ヲ食燕モ翼ヲカワス契ヲ不忘況ヤ相馴進テ不覺過タル十年余ノ袖ノ下ニ二人ノ子共ヲソタテ、千代トモ祈シ無甲斐モ御身ハ今秋ノ霜ノ下ニ伏シ少キ者共ハ朝ノ露ニ先立テ消ハテナン後ノ悲ヲ堪ヘ忍テハ時ノ間モナカラフヘキ我身カヤ

とある。元の軍記の本文がもつ「文芸的な」表現に着目した作者が、その表現を利用したと思しき叙述であるといえる。

また卷四ノ三「左近藏人頼員妻」は、『太平記』卷一の正中の変の倒幕計画が土岐頼員の妻により防がれたとする事件話であり、話末に

頼員大事を女にかたるこれちなきところなり。女房これをちゝにかたりしは。おやに孝あり。おつとにちうありとひやうせり

という、一字下げの評言的な部分をもつ。この「…とひやうせり」の部分は

評云(中略)人トシテ義ナケレバ。人ニ有ラズト也。又彼ノ男ノ心中ヲ計ルニ。只思ヒツメタル意ナク。舌ニマカセテ語り。行跡ハ草木ノ風ニ随ガ如クナランカ。是ヲ不覺人ト謂也。又女。父ニ語りシハ最賢シ。父ノ為ニハ孝有テ為男ニ忠有リシ也。謀叛人ヲ討ン為ニ。葛葉ヘ寄ルト披露シテ。軍勢ヲ集ルハ。最善キ略也。

(文明二年跋、正保二年(一六四五)刊『太平記評判秘伝理尽鈔』卷一「頼員回忠事」)⁽⁹⁾
といった、当時の代表的な『太平記』評論書である『太平記評判秘伝理尽鈔』の本文と共通する論評であり、作者が当時流布していた刊本のような作品本文のみならず、関連の軍書の「評」等にわたる様々な書承テキストを参照

しているものと考えられる。

このような方法について、三浦邦夫は『可笑記』における『徒然草野槌』の受容を例に

こうした異同の対照をすることによって浮かび上がってくる事柄がある。それは如儡子が『徒然草』のテキストを側に置いて、そのページの繰を繰って書くという営為がなければ、テキストの文章をそのままに『可笑記』の文章のなかに生かすことはできないという実態である。単なる記憶だけを頼りにしてはテキストの文章をそのままに使うことは不可能であろう。^①

と指摘した。『本朝女鑑』の所収話の叙述もまた、出典の逸話の大筋を踏まえているだけではなく、当時の書かれた「テキストの文章」を充分に利用している可能性の観点から、その性質を再考する必要がある。本作を了意作か「真偽未決のもの」とした北条秀雄は、「文章は平凡で、達意を旨とし」「文勢を以つては作者を判断し得ない」としている。これは、作者独自の個性的な表現であるか否かというよりも、先行する文芸に基づいた表現の「型」の再構成が多分にみられるという、『本朝女鑑』の文章の性質に与えられた評価とも考えられる。あるいは『本朝女鑑』作者が、むしろそのような「抛りどころのある」歴史的文献や軍記から取捨選択した「文体」を、逸話の造型上、当時の「達意」において効果的な表現として、意図的に用いているのではないだろうか。

二、先行作品を利用し主題に向かう「虚構」

しかし『本朝女鑑』には、先行作品の叙述を「踏襲」するだけではなく、その歴史的な事件を基に「虚構」の筋を「創作」しているとみられる箇所が散見する。幼い実子を捨て前妻の子である兄を救おうとする『列女伝』『梁節姑姉』の話を『欽明紀』の事件に加えて、本来歴史的事件として伝えられていない要素を造型した巻一賢明部上ノ六「馬飼歌依妻」のように、複数の作品の筋を合成する方法を、前掲浜田論文は「撮合」^②と指摘する。題材となる先行作品の「物語」を利用しつつも、題材に元々存在しなかった事件や人物までもが「創作」される（浜田氏はそ

れを「虚構」とする）場合も、やはり先行する軍記等の本文に作者は触発され、語られる事件の表現の文体とスタイルが獲得されていったものと考ええる。

当時の先行作品テキストの本文を利用した「創作」とみられる部分の方法を、巻六節義部下ノ十「柴田勝家妻」の例をもとに考えてみる。天正十一年（一五八三）の北ノ庄城の戦いに敗れた柴田勝家の妻お市の方の逸話である。歴史的に実在する人物の事件の話ではあるが、作品本文の造型の仕方を、出典と指摘される『太閤記』巻六「勝家切腹之事」の、当時のテキストの一つである万治四年刊本の本文の叙述と照らして考えてみたい。

そこにはのふながこうのいもうとなれば。ことによしやうの御身。なにくるしかるべき。とくくしろをいでゝ。いかならんかたにも御身をよせ給へとありしに。こだにの御かたなみたぐみ給ひて。去ぬるあきのすゑに。ぎふよりまいりてみえそめたてまつりしより。この世。のちの世。かはらじのちきりのすゑは久かたの。月日にかけしむつごとの。いまさらわすれ申すべきや。ひに入も水に入も。さきの世のむくひなり。ゆみやとるいゑにむまれては。かゝる事あるべしとは。かねく思ひまうけたれば。はじめて。おどろくことにあらず。じやうちうにとゞまり。おなじみちにおもむきて。かはらぬちきりをのちの世に。なをふかくこそすすべけれどとて。すでにしゆえんはじまりぬ。

（柴田勝家妻）

御身は信長公之御妹なれば。出させ給へつゝ、がもおはしますましきと有しかは。小谷御方なみたくませ給ふて。去秋の終り岐阜よりまいり。斯見えぬる事も前世之宿業。今更驚へきに非ず。爰を去ん事思ひもよらす候。しかはあれと三人之息女をは出し侍れよ。父の菩提をも問せ。又みつからが跡をも弔はれむためそかしのたまへは。いと安き御事なりとて其よし姫君に申させ給ふ。姉君いやとよ。母上共に。同じ道にゆかん物をと。啼悲ひ給ふを。文荷斎そのわけをも不聞入御手を引立三人を出し奉りぬ。

（『太閤記』巻六「勝家切腹之事」）

勝家がC「信長公之御妹」であるからと脱出を勧め、小谷御方がD「なみたく」み語り出すこと、去る秋に岐阜より輿入れし、「前世」の因縁を感じ、E「今更驚へきに非ず」という『太閤記』巻六の本文の構造がある。「柴田勝

家妻」のc、dの本文は、これとよく似た構造を持っている。e1「いまさら」・e2「おどろくことにあらず」も、E「今更驚へきに非ず」からきているのではないか。このような点から、「柴田勝家妻」は『太閤記』巻六のテキストが持っていた本文の「型」を踏まえ、活かしながら書かれたものである可能性があると考えられる。

だが「柴田勝家妻」の文脈は、「かはらじのちぎり」から徐々に異なった方向に向かう。小谷御方が城中に残り息女三人を脱出させる『太閤記』巻三の話のように展開せず、城に残る勝家と御方夫婦二名の「かはらぬちぎり」に焦点が当てられるのである。「柴田勝家妻」の夫妻のf「おなじみちにおもむきて」の表現は、『太閤記』巻六で姉娘が母と運命を共にすることを望む際のF「同じ道に行ん物を」という表現を踏まえて変容されているのではないだろうか。この方法によって、後の豊臣方と徳川方の武家の運命に影響する三姉妹を逃し生存させた母の歴史的動向そのものよりも、御方がいかに夫勝家に対する「節義」の妻であったかということが、この逸話の造型の主眼として残ることになる。すなわち本話においては、「節義」の性質を強調する方向に、先行するテキストの語句や表現を利用する手法が意識的に用いられ、そこから「勝家妻」の節婦像が形成されたものと考えられるのである。

三、軍記の文体から「創作」される逸話の行方

『本朝女鑑』における軍記物の出典では『太平記』が最も多く、十四話ある。作者が当時の書承、すなわち『太平記』慶長板をはじめとする古活字本、及び『太平記評判秘伝理尽鈔』等を参照し、その「妻」や「母」たちの人物逸話を造型している可能性がある。以下、『太平記』に関連する巻話を掲げる。

『本朝女鑑』

『太平記』

巻三ノ六 「京極御息所」

巻三十七 「身子声聞一角仙人志賀寺上人事」

巻四ノ三 「左近藏人頼員事」

巻一 「頼員回忠事」

巻四ノ四 「結城親光妻」

△巻十四 「將軍入洛事附親光討死事」

『本朝女鑑』と軍記

卷四ノ五「楠帶刀母」

卷十六「正成首送故郷事」

卷四ノ六「菊池入道寂阿妻」

△卷十一「筑紫合戦事」

卷六ノ二「右京亮時治妻」

卷十一「越前牛原地頭自害事」

卷六ノ三「越中守護三妻」

卷十一「越中守護自害事附怨霊事」

卷六ノ四「佐介貞俊妻」

卷十一「金剛山寄手等被誅事附佐介貞俊事」

卷六ノ五「亀壽丸乳母」

卷十「亀壽殿令落信濃事附左近大夫偽落奥州事」

卷六ノ六「瓜生判官母」

卷十八「瓜生判官老母事附程嬰杵臼事」

卷六ノ七「那須五郎母」

卷三十三「京軍事」

卷六ノ八「兵部少輔某妻」

卷三十三「飢人投身事」

卷八ノ三「左衛門佐局」

卷四「笠置囚人死罪流刑事附藤房卿事」

卷八ノ四「勾当内侍」

卷二十「義貞首懸獄門附勾当内侍事」

このうち十二話は、『太平記』本文にも「妻」「母」等の女性本人が登場する。前出の卷六ノ二や卷四ノ三の例をはじめ、巻話の題に女性名そのものが掲げられるもの（瓜生判官老母、勾当内侍等）以外でも、逸話の中の主要人物の行動に関わる働きをもつ「女性」登場人物に焦点を当てるような話として造型されている。

だが卷四ノ四「結城親光妻」と卷四ノ六「菊池入道寂阿妻」の二話（△で示す）については、それぞれ『太平記』の該当の巻話の事件の中に「妻」という人物が全く登場しない。この二話は、軍記に語られる「歴史」上に存在しない人物の逸話でありつつ、本文は『太平記』卷十四と卷十一の表現を参照したとみられる叙述をもつ。この場合、軍記から題材を得ているというだけでなく、軍記から獲得した「文体」がさらに新しく逸話を発生させている、とみることができるのではないか。

卷四ノ六「菊池入道寂阿妻」は、『太平記』卷第十一「筑紫合戦事」の事件を描くものだが、

妻いさめけるやう。恩のために身をわすれ。義によつて命をすつるは。勇者のするところなり。一たび御み

かたにまいらんとて。綸旨にそへて御はたを給はりなから。心を変ずる。小式大伴が振舞さらに人倫にあらず。これにむかつていのちをすてんより。たゞ英時にむかひてうちしにしたまへ。王事監ことなしといふ事あり。大伴も小式もやがていきをひをうしなふべし。

h さればこそいゑをたちいづるよりはかくこそあるべけれ。いかに肥後守よ。かならず時をまちてひまをうかゞへ。ようがいをかまへて敵をちかづけず。運命をはかりて。こうをなすべし。いまはにうだうどのゝまち給ふらんとて

故郷も今夜ばかりの命ぞとしりてや君が我を待らん

とかきをきて。自害して死けり。

『太平記』本文に登場しない「妻」が、gでは少式貞経や大友貞宗に裏切られた後醍醐帝方の寂阿の自暴自棄を諫め、九州探題への攻撃を励まし、hでは敗れた父武時の命で帰郷し悲嘆する嫡子肥後守武重を諭す役割を果たす。話末では「時の人みないはく。大伴小式は人倫にあらず。菊池が妻よく天命をしりて。義をすゝむ。入道よく義をまもりて忠をほどこせりといふ」と、妻の意見や寂阿の行為を人々が「義」として支持したことが記される。後に幕府の北条方が滅亡し「小式大伴また。探題ひでときをうつて。官軍に属せし」行為を「まことに頼みがたきは人の心なり」と評価する結びに至るまで、その叙述は『太平記』卷十一の「サテモ少式大伴が今度ノ振舞人ニ非ズト天下ノ人ニ被譏ナカラ」や、「行路難不在山兮唯在人情反復之間ト白居易ガ書タリシ筆ノ跡今コソ被思知タレ」といった部分に基づくものとみられる。

菊池寂阿入道の少式襲撃の行為について、前掲『太平記評判秘伝理尽鈔』卷十一「筑紫合戦事」は、少式の太宰府解職と大友の守護職への執着など、幕府方を恨む彼等の原因と比べて「菊池ハサセル恨モナシ。常ニ此入道。文ヲ好テ武ヲタシナミ。道ヲソムカン事ヲ深ク悔ユ」とし、「評云」には「ワヅカノ小勢ニテ。探題ノ館ニヲシヨセ討死セシ事。勇義ハ在テ智謀ハ少シモナシトニヤ」二情以ルニ彼入道ハ正直ニシテ。慮ミジカク。ハラノ悪シキ人ニテヤアリケン」という、寂阿入道の出兵の短慮さへの批判もある。一方、「子息ノ武重ヲ古郷ヘカヘセシハ。最賢キ謀

ナルヘシ」「家ヲ断サジカ為ナレハ。祖ニ孝アリ。又道ナリ」「武重父ガ命ニ随テ父ヲ捨テカヘリシハ。孝アリ。義アルノ道ナリ」と、武重を故郷に帰らせた父の行動に高い評価を与える。『理尽鈔』はそれを「智謀」と考え、武重を不孝者ではないとして「始謂セシ人。サテハ武重ハ北ケテンケリ。親ヲ捨テハ如何ニ親ノ宣命共イヘ。北ケラレマシキソト謂シ。此等ハヨク愚ニ理非ヲ了ラザル人ノ謂タルナルヘシ」と嗜める。こうした弁護的な評は、逆に、父を残して去った武重の「帰郷」を不孝と非難する当時の評判が一説に存在したことを推測させる。このことは、『本朝女鑑』巻四における本話の配列された位置とも関係しているのではないか。

『本朝女鑑』巻四では配置上、『太平記』による巻四ノ五「楠帯刀母」と本話、そして前出の『明徳記』による巻四ノ七「山名陸奥守妻」が続く。「寂阿妻」は、敗死した父の遺児を母が諭す「楠帯刀母」の話とも、敗戦下で「父を残して去った子」の母の話である「山名陸奥守妻」とも、通う状況である点において、これらの行為を比較し問う意識によって作者が位置づけた話であると考えられる。

「菊池寂阿入道妻」の息子武重は、父の命に一度は抗おうとして葛藤する人物として描かれる。父を見捨てて脱出し母から激烈な叱責を受ける「山名陸奥守妻」の息子と、「敗れた父と子の別れ」という状況は共通しながら、息子の行動と母の態度は対照的である。軍談的要素の濃い所収話の「武将の妻」像と合戦観が、並べて呈示されることによって、個々の逸話が全くばらばらではなく、配列された位置によって連関したテキストであるという印象を、受容者に与える。『明徳記』では氏清の死の後、婿の播磨守満幸も敗走し出家するが、幕府の追討を受け再度挙兵の後に討死する。「山名陸奥守妻」は、反幕府軍の将の妻の悲劇的な最期という『明徳記』の構図が、明確に解釈される一話である。一方、『太平記』の筑紫合戦の対立の構図は、御所方と幕府方の「義」が状況によって変転錯綜する、九州地方での諸氏の抗争の性格が強い。事件の造型には、鎌倉幕府滅亡前の御所方の「早すぎた」敗戦、後の武重の活躍等への『太平記』の解釈なども反映されているとみられる。その点においても、「寂阿妻」は、先行する「山名陸奥守妻」のような軍記の逸話に触発されて生み出された、対照されるべきもう一つの敗軍の将の妻・母の逸話であったと考えられるのである。

戦国時代終焉後の組織的な社会秩序の構築が進む近世前期社会の読者に、軍記的世界の女性の倫理をめぐる逸話が、教訓的かつ興味深い読物として享受された可能性は高い。この「寂阿妻」と「山名陸奥守妻」の二つの逸話は、正徳二年（一七一二）刊行の中村惕斎『比売鑑』紀行編巻十にも所収されており、

菊池山名が妻、夫の死にしたかへるは、たゞそのわかれをかなしむばかりならずして、義をしれる事、他にことなり、故に菊池が妻は後の忠節をすゝめて子をのこしをき、山名が妻はいまの不孝をにくみて子をすてたり、されど菊池が妻はしなずして、子のゆくすへみとげなんもなをいみじかるべし、山名が妻はその死、義にあたれり¹⁶

と、並び立つものとして掲げられ、明らかに「菊池寂阿妻」「山名陸奥守妻」の二人を比する「義」の逸話としての論評が与えられている。孝子武重の「ゆくすへ」を母が見遂げられなかった点は惜しまれてはいるが、同時に、『本朝女鑑』が生み出した虚構の「菊池寂阿妻」の存在は、歴史的逸話として堂々と成立していることになる。作品解釈の「評判」が、女訓的な逸話に盛り込まれる事件の造型や本文の表現にも影響を与え、後にはこのように比較的通俗的な教訓の意味を伴いつつ、共有されていく。

なお『比売鑑』以降も、これらの逸話は伝承される。明治十六年（一八八三）刊の日柳政惣（黙軒）¹⁷編『本朝女鑑』（浪華文会）¹⁸は、同書名の寛文元年刊『本朝女鑑』からのみならず、前述の『本朝列女伝』や『本朝孝子伝』（貞享二年刊）等、さらに様々な作品からの女性逸話を再編集したものであり、各話末に「日本紀」「続日本紀」等の史書、『平家物語』『盛衰記』『太平記』等の軍記、その他『俊頼髓脳』『発心集』等、さらには寛文以降の「和論語」「女郎花物語」「比売鑑」等の仮名草子を含む、出典とみられる書名を掲げる。「寂阿妻」「山名陸奥守妻」の二話は、この黙軒編『本朝女鑑』では「母」の逸話として主題が捉えられ、「第二篇 母儀伝」に所収される。そして、この二つの話のものはや「松下禅尼」「楠正行母」「救子継母」「菊池寂阿妻」「瓜生保母」「那須五郎母」「山名氏清妻」「清水上野介妻」「幸田彦左衛門母」「佐竹義隆妻」「原元辰母」と並ぶ逸話の中に、それぞれ別箇に独立して配置されるに至る。

『本朝女鑑』の作者は、軍記などの先行文学の表現の利用により創作された虚構を「歴史的事件」そのものであったかのように文脈の中に滑り込ませている。個性的な文体の特異さには依らず、その歴史解釈の典拠に由来するかのような文体の「逸話」を残し、伝えられ持続させる方を選んだのではないか。果たして、創作的に発生した変異は変異として排除されることなく、「持続可能な」逸話の文脈として、近代以降まで残ることになった。作者の試みた「虚構」の創作は成立後に作者の手を離れ、その後は「虚構」であったことから離れて、あたかも歴史的事実であったかのように受容され、解釈史を発生させていく。

近世文芸における歴史的な逸話の一つ一つの変容は、仮名草子が歴史の記録の価値を復興させようとしてそれを叙述する行為の中に、既に発生していたと考えられる。本作のもつ教訓的文脈に関わる他の逸話の出典とその利用方法についても、さらに追考を行いたい。

注

- (1) 本論中の『本朝女鑑』本文の引用は近世文学資料類従 仮名草子編六・七『本朝女鑑』(上)(下)(勉誠社、一九七二～一九七三年)影印の西村又左衛門尉板に基づき、現行の字体に改めたものを用いる。西村板翻刻は『仮名草子集成 第六十五卷』(東京堂出版、二〇二一年二月)に収録。なお、本稿の作品本文引用における傍線は、引用者が便宜上付したものである。
- (2) 浜田啓介「刊行のための虚構の発生——本朝女鑑の虚構」、『近世小説・営為と様式に関する私見』(京都大学学術出版会、一九九三年十二月)所収(初出『国語国文学』五五・五六、昭和六十一年)
- (3) 井上泰至『近世刊行軍書論——教訓・娯楽・考証——』(笠間書院、二〇一四年九月)
- (4) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』第一(井上書房、一九六二年十二月)
- (5) 青山忠一『仮名草子女訓文芸の研究』(桜楓社、一九八二年二月)「八 本朝女鑑」二〇七頁、巻六の指摘。
- (6) (5) 同書。
- (7) 『明徳記』下、寛永九年刊本、刊記「寛永九年壬申冬吉日刊行 佛光寺下ル町西側 河南四郎右衛門」、国文学研究資料館鶴飼文

- 庫 (http://dbrec.niji.ac.jp/KTG_B_200019157) 画像参照 (以下、画像利用は二〇二〇年十月二十六日現在)。
- (8) 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース (筑波大学附属図書館 マイクロ収集ル140-85) (<https://kotenseki.niji.ac.jp/biblio/100027006/viewer/1229>) 資料画像参照。
- (9) 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース (盛岡市中央公民館 マイクロ収集 1158) (<https://kotenseki.niji.ac.jp/biblio/100163132/viewer/2707>) 資料画像参照。
- (10) 「了意関連作には「理尽鈔」の利用がある」とする湯浅佳子「鎌倉北条九代記」における歴史叙述の方法」(『近世小説の研究——啓蒙的文芸の展開——』汲古書院、二〇一七年二月、第一部第四章「近世重書の研究」)の指摘があるが、作者については本稿では断じず後考としたい。
- (11) 「第三章 仮名草子に於ける『徒然草野槌』の受容の様相」三浦邦夫『仮名草子についての研究』(おうふう、一九九六年十月)所収。
- (12) 北条秀雄『新修浅井了意』(笠間書院、昭和四十九年九月)
- (13) (2) 同。
- (14) 国文学研究資料館蔵、新日本古典籍総合データベースによる小瀬甫庵『太閤記』寛永三年序、万治四年刊本 (<https://kotenseki.niji.ac.jp/biblio/200009703/viewer/225>) の本文を参照。
- (15) 川添昭二編『鎮西探題史料集』下(私家版 昭和四十年)所収の良寛『博多日記』には菊池寂阿による博多の暴動(榊田神社焼討)、寂阿と三郎の討死と梟首、その後の各将の動向や怪異(寂阿の甥の霊の出現)等が記されている。
- (16) 『仮名草子集成 第五十九巻』(東京堂出版、二〇一八年一〇月)所収「比売鑑」紀行(翻刻本文を参照、早稲田大学蔵「比売鑑」(早稲田大学古典籍総合データベース https://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_e0238/index.html) 本文より引用し、句読点は引用者が補った)。
- (17) 梶原竹軒『讃岐人名辞書』(高松整版印刷所、昭和八年)「ク之部」(国会図書館デジタルコレクション、info.ndjp/pid/1080549)によると、陸軍省のち大阪府師範学校長、浪華文会主催、教科書や雑誌の刊行を行った医師・文人・教育家。日柳政愷(くさなぎ まさのり)、字は終吉、通称道之助、号を三舟又玉城。父は燕石、天保十年七月十四日生、明治三十六年七月廿三日没、著書『覆麗小稿』等。
- (18) 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndjp/pid/758317>) (info.ndjp/pid/758318) 上・下二巻二冊。

